

讀書論



[讀書論_下载链接1](#)

著者:小泉 信三

出版者:岩波書店

出版时间:1964-11-20

装帧:文庫本

isbn:9784004150879

作者介绍:

小泉 信三（こいずみ しんぞう、1888年（明治21年）5月4日 - 1966年（昭和41年）5月11日）は、日本の経済学者。今上天皇の皇太子時代の師父。1933年（昭和8年）～1946年（昭和21年）まで慶應義塾長。父は慶應義塾長（1887年（明治20年） - 1890年（明治23年））や、横浜正金銀行支配人などを歴任した小泉信吉（こいずみ・のぶきち）。

1888年（明治21年）5月4日、東京市芝区に旧紀州藩士・小泉信吉と千賀の第三子として生まれる。幼少期に父を亡くす。なお父が福沢諭吉の直接の門下生だったので、晩年の福沢に目をかけてもらっており、幼少時に福沢先生邸に一家が同居していた時期もあった。横浜本町の横浜小学校を経て、東京府三田に転居し東京府・芝區・御田小学校に転校し卒業。御田小学校から慶應まで同期生として水上瀧太郎がいた。

1910年（明治43年）慶應義塾大学部政治科を卒業し、慶應義塾の教員となる。1912年（大正元年[1]）9月[2]に研究のためヨーロッパに留学し、イギリス、フランス、ドイツの各大学で学ぶ。イギリスへの留学中、小泉は1913年（大正2年）のウィンブルドン選手権を観戦したことがあり、当時大会4連覇中だったアンソニー・ワイルディングの著書“On the Court and Off”（「テニスコートの内外で」）を日本に送り、大学の後輩たちに硬式テニスを推薦した。

1916年（大正5年）に帰国し、慶應義塾大学教授となり、デヴィッド・リカードの経済学を講義する。自由主義を論調とし、共産主義・マルクス経済学に対し徹頭徹尾合理的な批判を加えている。1933年（昭和8年）には慶應義塾大学塾長に就任する。1943年（昭和18年）帝国学士院会員に任命される。時代は第二次世界大戦に入り、信三の長男の小泉信吉が出征したのち戦死。一人息子を亡くした信三は、『海軍主計大尉小泉信吉』を著し、私家版として関係者に配り、没後に公刊された。信三自身も1945年（昭和20年）の東京大空襲で、焼夷弾により顔面に火傷を負ったため、一時は高橋誠一郎が塾長代理を務めた。1947年（昭和22年）に塾長を辞任し、後任に潮田江次が就任した。

1949年（昭和24年）には、継宮明仁親王（現在の今上天皇）の教育掛（東宮御教育常時参与）に就任。『ジョージ5世伝』や『帝室論』などを講義し、新時代の帝王学を説いた。1954年（昭和29年）、コロンビア大学より人文学名誉博士号を贈与される。1959年（昭和34年）11月、文化勲章を受章。

1966年（昭和41年）5月11日、心筋梗塞のため78歳で死去。

没後、慶應義塾はその業績を記念し「小泉基金」を設立。1968年（昭和43年）からは「小泉信三記念講座」が実施されている。1976年（昭和51年）から全国高校生小論文コンテスト「小泉信三賞」が行われている。

小泉は共産主義の批判者であったが、同時に共産主義を深く研究していたことは特筆すべきことである。小泉が社会主義に興味を持つ切っ掛けとなったのは、幸徳秋水等が処刑された大逆事件である。

『共産主義批判の常識』は新潮社より刊行されベストセラーとなった（後に講談社学術文庫で再刊）。小泉の著書の中でもっとも多く読まれた著書の一つである。塾長退

任後に、マルクス・レーニン主義が国家再生の思想としてもてはやされていた状況を憂慮し、1949年（昭和24年）に発表された『共産主義批判〜』は、昭和初期に行った共産主義批判の論文と内容に大差はないが、戦後のソ連共産主義についての直接の言及が多くなっている。この流れで講和問題でもソ連とは与せず単独講和論を主張している。

←<http://ja.wikipedia.org/wiki/小泉信三>

目录:

[読書論_ダウンロード1](#)

标签

闲书-人文

评论

[読書論_ダウンロード1](#)

书评

[読書論_ダウンロード1](#)